

ART KISS LETTER

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

vol.54

FREE

AUTUMN
[2011.秋号]



《Terminal Documents》展示風景



小谷元彦さん



《inferno》展示風景

巻頭言 幻の王国—輝く分水嶺

熊本市現代美術館館長 桜井武

この秋、熊本市現代美術館では、鮮やかなコントラストを成すふたつの個展が開催されている。日本の現代美術の最先端に行く小谷元彦展と、それと全く対照的な伝統的技法を駆使する型染の長尾紀壽展である。一方は、1500 平米の企画展示室全体が深い闇とまばゆい光が広がる小谷の世界。もう一方、長尾は井手記念室とギャラリーⅢの両室を使用し、素材、技術は伝統的であっても、モダンの表現が鮮やかな高い密度を生み出している。このふたり、年代もスタイルも表現素材も全く異なるが、追い求めるものはかなり近いと思える。それは人間存在の根源に通じる実際には見えないものの形象化である。小谷にとってそれは幽体、つまりファントムであり、痛みであるとか羨望、欲望、嫉妬、といった具体的な形としては見えないものが、工業素材やハイテクを駆使し、暗闇と光を通した圧倒的な形象化に成功している。ファントムは何であり、誰であるのかと問われれば、その答えは、それは小谷元彦であり、彼の構築した世界であるといえよう。暗黒と閃光、上昇と下降が激しく交錯するその迷路のような世界は、バロック的でもあり、ダイナミックな広がりや印象付ける。小谷の作品群は、過去と未来の分水嶺に立ち、輝いている。長尾紀壽は、南の島の不可視の王国を探求する。《ジュゴンの棲む島—遠来神を祝ふ》は人魚の棲む島の秘祭を描いたもの。島の秘祭は、写真や録音はもとよりメモを取ることも許されず、長尾はじっとその行事を見つめて目に焼き付け、後にこの絢爛とした作品を生み出した。歴史が変わり、今では失われた南の島の王国を長尾は見続ける。

このふたつの展覧会は、まさに現代美術館ならではの、衝撃と魅惑に満ちた企画と言える。

熊本県現代
美術館の活動
MUSEUM INFORMATION

第7回城下町くまもと ゆかた祭

2011.7.16-17

熊本市中心街で「第7回城下町くまもとゆかた祭」が開催されました。この日、ゆかたを着て街を歩けば特典がいっぱい。美術館でも入場料が半額。スタッフ、受付、皆でゆかたを着てお出迎えしました。おりしもCAMKでは「ファッションー時代を着る」が開催中。会場は、時代を代表する衣服と浴衣姿の来館者の方々が大変不思議で素敵な共演をする、華やかな空間となっていました。(M.F)



matohuアーティスト・トーク

2011.8.6

matohu(まとふ)の堀畑裕之さん・関口真希子さんによるアーティスト・トークが開催されました。お二人がそれぞれデザイナーを目指すようになったきっかけ、出会いから、作品をつくるまでの過程など、幅広くお話いただきました。また特別に、トークの合間に「織部II」(2010春夏)、「KASANE」(2011春夏)のショー・フィルムを上映していただきました。堀畑さん曰く、「織部」というのはゆがんだかたちも特徴のひとつで、それをモデルさんのウィッグがどんどん歪んでいくのに使っています。「KASANEは、桜の咲く頃から初夏までの時間の移り変わりを発表する順番で表現しています」などと、みどころのポイントを教えてくださいました。「織部II」はファッション展会場でも放映しました。客席からも大変興味深い質問がいくつも挙げられました。本展で、堀畑さんが興味深く感じられたのは、マドレーヌ・ヴィオネという回答でした。好きな芸術家は、堀畑さんは杉本博司とマチス、関口さんはクレーという話題のなかで、作品の色使いに対するこだわりでよく議論します、という制作現場のこぼれ話もお聞かせくださいました。講演会の終了後、高校生や服飾専門学校生からの質問に、丁寧に真剣に長い時間をかけて回答される様子が感動的でした。(H.T)

【参加人数100名】



プレママ&ファミリーツアー

2011.8.6

「ファッションー時代を着る」展のプレママ&ファミリーツアーを行いました。ご参加いただいた小さなお友だちは、ドレスを着るのはまだまだ先の年齢ではありましたが、意外にもお父さんの参加も多く、実用性主体の子育てファッションから、ひととき非日常的なラグジュアリーな世界を楽しんでいただけようでした。(A.S)

【参加人数：15人】

ワークショップ「紙の服をつくろう」

2011.7.30

小学3～4年生を対象としたワークショップ「紙の服をつくろう」が行われました。まずは「ファッションー時代を着る」展を見て、イメージをふくらませます。色鉛筆でイメージスケッチを描いたら、さっそく制作にとりかかりました。今回ベースとして準備したものは扱いやすい「不織布」のピンク、ブルー、グリーン、オレンジです。意外だったのは女の子たちに人気の色がブルーの不織布であったこと。意外とシンプルなお洋服になるのかな？と思いきや、果物をたくさん描いて作ったワンピースや、袖口にリボンやお花をあしらったフリフリでキュートなドレスが出来上がりました。やっぱり女の子ですね。いっぽう男の子はというと、アイスクャンディをでーん！と正面に取り付けたデザインや、草むらに隠れるのだからか？と思わせるように草が前後に装飾されたもの、恐竜のような背びれがついたものなど、遊び心満載のデザインでした。出来あがった作品は8月28日(日)まで、ホームギャラリー横通路に展示いたしました。(C.T)

【参加人数：16人】



ヒロ・デザイン専門学校 ファッションショー

2011.7.31

ヒロ・デザイン専門学校による「Graduate of Hiro-Design Fashion Show 2011」が開催されました。オープニングではdocomoとコラボして、「携帯に合うスタイル」を提案、街なかでファッションブルな女性たちが携帯を片手に活動する様子を演出しました。ヒロ・デザイン専門学校の卒業生である中島佳奈子さん(2007年装苑賞受賞)のテーマは「パリの風」ということで、男性のファッションは色彩と形態が鮮やかでユニークなもの、女性のファッションは繊細な素材をふんだんに重ねて作ったボリュームーな形態や花などのモチーフが目につきました。会場を熱気で埋め尽くした観客の皆様と楽しんで大成のファッションショーでした。(H.T)

【参加人数：200人】



平成23年度学芸員実習

2011.8.18-8.27

本年度の学芸員実習は、過去最多の13校から22名の実習生を受け入れ、8日間の日程で実施しました。座学形式の講義のほか、菊池恵楓園絵画クラブ訪問、AKL作成実習、図書の整理、フリーゾーン作品のギャラリートーク演習など盛りだくさんの内容でしたが、皆さん生き生きと活動していたのが印象的でした。熊本市現代美術館での経験が、今後の進路や生活の中で役立つことがあれば幸いです。(A.S)

ボタンをつくらう ワークショップ

2011.8.28



小学5年生から大人の方まで15名参加されました。ボタンは、クッキーの型や身近にあるもので型をとったり、手びねりで自由に作った形に陶芸用の絵具で彩色をしました。植物、乗り物、虫や動物など、秋の装いにも似合いそうな世界でひとつのオリジナルのボタンができました。(M.O)

【参加人数：15人】

「小谷元彦展 幽体の知覚」開幕!!

2011.9.17-11.27

「小谷元彦展 幽体の知覚」が開幕しました。国内外で高い評価を受ける若手現代美術家、小谷元彦の初期の代表作から最新作までを一堂に展示し、本格的に紹介する九州では初めての展覧会となります。本展は、昨年11月に森美術館でスタートし、静岡、高松を経て、熊本にて閉幕する1年をかけた巡回展です。最終会場となる熊本では、静岡より登場した水面に映像を投影する大型ビデオ・インスタレーション《Terminal Documents》や、熊本のみとなる《SP extra 畸形脳面集》全シリーズを展示するなど見応えたっぷりの展覧会となっております。木彫から写真、映像、体感型インスタレーションまで多様な作品が展示される圧倒的空間で、身体全体の感覚を解放し、作品から放たれる「幽体」(ファントム)に触れていただけますと幸いです!(A.A)

小谷元彦 アーティスト・トーク

2011.9.17

「小谷元彦展 幽体の知覚」開催記念として、小谷元彦さんのアーティスト・トークを開催いたしました！トークでは、展覧会のコンセプト「幽体」(ファントム)を中心にお話いただきました。小谷さんの考える「幽体」とは、①気配のように、目には見えないが存在しているもの、②姿を変え、変異、変容していくもの、③精神と身体のバランスが崩れ、乖離が生じる状態、④自分の中に潜む認めたくない「もう1人の私」という存在、など複合的要素が絡み合ったものです。伝統的な技法による彫刻作品から、現代の技術を用いたインスタレーションまで、多様な作品を制作する小谷さんですが、これまでの作品を振り返ってみると、「幽体」という言葉でつながっていたと語られるお姿が印象的でした。その他に、彫刻という表現メディアの役割と可能性、彫刻とは空間全体を使用して実体と存在を表現する「効果」を作り出す装置であるというお話、美術とは一瞬で人々に訴えかける力を持ち、見る人の意識を変えるものという小谷さんの美術観など、多岐にわたるお話を伺うことのできる貴重な機会となりました。会場の皆さんも熱心に小谷さんにご質問をされ、最後はサインを求める方々が列をなすなど、盛り上がるトークとなりました!(A.A)

【参加人数：120人】



詩の朗読会報告

2011.7.28 & 8.25

第92回

2011.7.28

第92回となる今回は「20世紀のファッション」がテーマで10名の方が発表されました。展覧会でもご紹介していたフセイン・チャラヤンから着想を得た「身体」をテーマにしたものや、音楽や建築と同じ様に移り変わるファッションについて、また、20世紀の戦争を、軍服を通してみつめたり、高齢化社会とファッションについての詩作もありました。「ファッション」からあらゆる方向へ関心が向き各々が深まるような詩の朗読の夕べとなりました。(M.O)

第93回

2011.8.25

第93回詩の朗読会が開催されました。テーマは「帽子」。13名の方が詩作を発表されました。このテーマは、「ファッション 時代を着る」展にあわせて出題されました。少年時代の帽子と初恋、似合う帽子探し、麦わら帽子やベレー帽など季節の帽子、見えないけれども被っているかもしれない帽子、マジックに使うシルクハットなど、様々な帽子が登場しました。今年の夏は、つば広の帽子が女性の間で大流行しましたが、おしゃれさんは秋冬こそ帽子が楽しめる時期なのかもしれませんね。8月も終わりに近づくこの頃に、ぴったりのテーマでした。(H.T)

熊本まちなか美術館 まちなかフォトコンテスト展示&表彰式

展示 2011.7.20-7.31 表彰式 2011.7.24

昨年からはまった熊本まちなか美術館の関連イベントとして、まちなかフォトコンテストが開催されました。共催している当館では、入選作品約50点の作品展示と表彰式が開催されました。日頃見慣れている街並みが新鮮に感じられる写真が展示され、また表彰式では入賞者やその家族の喜ぶ表情が印象的な和やかな式となりました。(E.Z)

【参加人数：30人】

CAMK人形劇 「したきりすずめ」

2011.8.27

毎年恒例のCAMK人形劇。今年も「アートえんにち」期間に合わせて、劇団ばれっとの皆さんに公演していただきました。演目は「したきりすずめ」。コミカルなすずめの動きに笑っていたのもつかの間、いじわるなおばあさんが開けてしまったおおきなつづらから飛び出したお化けの数々に会場は「きゃー！」と悲鳴の嵐。本当に泣き出す子も見られましたが、最後はみんなにっこり笑顔で帰っていきました。楽しい夏の思い出になったようです。(E.Z)

【参加人数：130人】



vol.22

2011.6.18

テーマは「水のおはなし」。お父さんやお母さんのお膝の上で、絵本『カエルくんのみずたまり』や『みずたまレンズ』を集中して聞いてくれました。今日一番の盛り上がりを見せたのが、ビッグブック『びょーん』。ですカエルさんも、バツさんも、びょーんびょーんと大きく飛び上がり、それに合わせて親子で一緒にポーズしました。(C.T)

【参加人数：25人】



vol.23

2011.7.16

テーマは「夏の日」。ぐんぐんとたくましくお日様に向かって伸びていく様子を描いた絵本『ひまわり』や、開催中のファッション展に合わせてセレクトした紙芝居『はだかの王様』をご紹介します。なかでも「おー！」と、歓声が上がったのは、新聞紙を折って舟や島に形を変えながらお話する『ペーパーさん』でした。読み手のボランティアさんの手品師のような手の動きに、子どもも大人も目が釘付けでした。(C.T)

【参加人数：32人】



第12回お話し玉手箱 LIVE

2011.7.16

RKKアナウンサーの本田史郎さん、福島絵美さんが、今年もゆかた祭りにあわせて、浴衣で朗読していただきました。演目は、ミステリアスな、夏目漱石の「夢十夜」、落語絵本「おにのめん」、そして開催中のファッション展にあわせて華やかな世界が展開する芥川龍之介「舞踏会」でした。来場された方は、重厚な文章にある豊かな表現に静かに満たされていったようでした。(Y.H)

【参加人数：50人】



Street Art-Plex Kumamoto 協働事業

JAZZ OPEN 2011 ~ People's Channel ~

2011.7.23

CAMKでも毎夏恒例となったJAZZ OPEN！2011年の今年は、中心市街地7箇所で開催されました！当館のホームギャラリーでは、Nobuko Utterback Trioと藤本直子さん、後半は、ホワイトハウス元専属ピアニスト、Dr.Michael Holmesさんと、M's Angelsのお二人をゲストにお迎えしてお送りしました。熱気あふれるステージに、会場の皆さんも大盛り上がり。人と人のつながりをテーマにした今回、音楽と歌でつながる喜びと一体感を深く感じた一夜となりました。(A.A)

【参加人数：120人】



GIII vol.79 トーチカ「ReBuild」展

2011.7.23-9.11

ナガタケシ(熊本出身)とモノカヅエ(大阪出身)によるトーチカは、デジタルカメラによる長時間露出とコマ撮りアニメの手法を融合し、空中にペンライトの光でアニメーションを描くという作風、PIKAPIKAを生みだしたことで知られています。今回は、被災地で太陽光の光を使って撮影した新作《ReBuild》を軸に、震災直後に世界中からPIKAPIKAによる応援メッセージを集めて制作した《Safe and Sound project》、阪神大震災の復興記念事業として制作された《Build》等が展示されました。

7月24日にはアーティスト・トークも行われ、PIKA PIKAが誕生した経緯にはじまり、被災地でのボランティア活動や撮影の様子、現場の記録写真、被災地で活動をはじめているアーティストたちの様子など、その場所のリアリティあふれる記録画像が、作品にかける真剣さを物語っているようでした。(A.S)

【参加人数：40人】



トーチカ「PIKA PIKA IN KUMAMOTO」撮影ワークショップ

2011.8.7 & 8.21

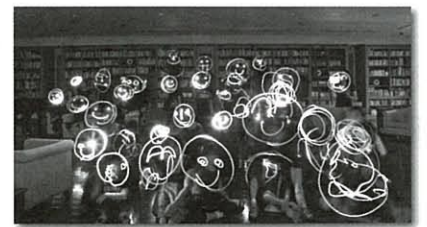
トーチカのお二人と市民のみなさんと二回に分けてPIKAPIKAの撮影ワークショップを行いました。7日は熊本城二の丸公園にて、スタッフで作成したパラボラ型特製ミラーやお玉を使い、太陽の光を反射させてPIKAPIKAの撮影をしました。約50名の参加者のみなさんと、トーチカのお二人の「1、2、3…」という掛け声に合わせてミラーで宙に絵を描いていきました。太陽光の淡く優しいPIKAPIKAが出来上がりました。

21日は雨となり、熊本城天守閣で予定していた撮影を、現代美術館に移して、ワークショップをスタートさせました。好きな絵や、ホームギャラリーのソファを使って少しずつ動かしながら、PIKAPIKAによるアニメーションをみなさんでつくっていきました。

このほかに河原町や熊本駅でもPIKAPIKAを行い、総勢100名の参加者のみなさんと「PIKA PIKA IN KUMAMOTO」を撮影しました。出来上がった映像は、現代美術館をはじめ、中心街の店舗にご協力いただき映像作品を展示させていただきます。

熊本の魅力がたくさんつまった楽しい映像作品に仕上がりました。(N.H)

【参加人数：100人】

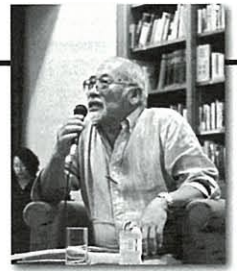


GIII vol.80 長尾紀壽 型染 祀りから沖縄へ 展

2011.9.14-10.30

沖縄在住の染色家・長尾紀壽さんの個展を開催しました。本展は、沖縄県宜野湾市にある佐喜眞美術館との共同企画展で、通常のGIII企画展より会場を拡大し、井手宣通記念室もあわせた会場として開催しました。1985年の初期作品から最新作まで16点を展示。抽象化された古代の祀りから、現在も続く沖縄独自の祭り、そして沖縄の農の風景が画題として取り上げられています。9月24日に開催されたアーティスト・トークでは、型染についての概論と、長尾さんのこれまでの経歴が紹介されました。続いて会場へと移動し、お客様の質問などにも答えながら、作品の特徴について個別にお話しくださいました。初期作品の版のサイズや、歪みのかかった版の原画の作り方、沖縄の秘祭の取材など非常に興味深い話ばかりで、観客の皆さんも熱心に耳を傾けていました。

【参加人数：30人】



河原町アートの日関連イベント 大巻伸嗣アーティスト・トーク

2011.8.14

河原町が当館と共催で行っているアサヒ・アート・フェスティバル2011のイベントの一環として、河原町で大巻さんとのモニュメント作りが企画されています。そのワークショップのために来熊されている大巻さんに、一昨年度の当館での公開制作の様子や最近の活動についてたくさんのスライドを交えながら語っていただきました。(E.Z)

【参加人数：40人】



[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう?」の意です

[展評]

本号のArt de Gyanは、学芸員実習の実習生に取材にチャレンジしてもらいました。

敬称略、50音順 青木知加(H.A)、岩本望来(M.I)、浦由有子(Y.U)、江藤由貴(Y.E)、小川万莉子(M.O)、児玉美咲(M.K)、斉藤聖枝(K.S)、雀ヶ野智美(T.S)、田中智也(T.T)、田中結衣香(Y.T)、東山亜耶(A.T)、中村友麻(Y.N)、西田真理(M.N)、濱本祐華(Yu.H)、樋口友香(T.H)、福岡さくら(S.F)、松田慶子(K.M)、宮崎竜乃介(R.M)、村田陽子(Y.M)、柳寛子(H.Y)、吉岡優(Y.Y)、米満恵美(E.Y)

古川善久 作陶展vol.2

2011.8.23 ~ 2011.8.28 熊本県伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35 096-324-4930

熊本県山鹿市在住の古川善久さんによる陶芸の展覧会。会場には小皿やコップから大きなランプシェードまで日常生活を意識した作品が数多く置いてあり、面白い工夫がなされていた。中でも目を引いたのは陶器のスマートフォン用スピーカーであった。これは反響を利用して音を大きくする仕組みなので、電源が不要である。スマートフォンをお持ちの方は是非体験していただきたい。釉薬は一切使わず、作品の周りに炭を敷き詰めて焼く独自の方法で焼き締めており、これによって茜色、金色など陶器とは思えない光沢を放つ。手に取って見る事ができるので、様々な角度から作品の美しさを味わい、気に入った作品は購入することも可能だ。陶芸の新たな可能性を感じさせる展覧会であった。(Y.N/T.T)



プロ和裁士の作品展示と手縫いの実演

2011.8.24 ~ 2011.8.28 熊本県伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35 096-324-4930

熊本県和裁組合連合会による作品の展示と実演、販売が行われていた。展示品のなかではプロの和裁士が一針一針丁寧に縫い上げた十二単が特に目を引いた。豪華な刺繍で施された鳳凰が優雅に飛ぶデザインである。この作品は熊本城のイベントにおいて実際に着用されたこともあるそうだ。また、会場ではお手玉や巾着、根付け作りなどの体験コーナーや、クマモンのパッチなどの手縫いの実演も行われていた。しじみ貝に様々な模様の千代紙を自分で選んで貼り付けてすぐに作ることが出来る、根付け作りを体験させてもらった。プロ和裁士の森喜三男さんは、このような機会を通して多くの人にもっと和に触れてもらい、気軽に着物を着てほしいと語っていた。(Y.Y/Y.U)



魅惑・ときめきRafu展

2011.8.19 ~ 2011.8.31 画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町5-13 096-344-3135

熊本在住の作家 14 名による裸婦を描いた作品が並び、水彩や油彩、日本画、パステル画、デッサンなど、作家によって画材も描き方も多様で、小作品ながら独特の世界観が広がり、それぞれ違った裸婦の魅力が楽しめる。中でも、二宮弘一さんの作品は、暗い背景にふわりと浮かび上がる裸婦を、ブルーの光が包み込んでいるようでとても幻想的だ。沼田初江さんの作品は、リズムカルに動く線とタッチが印象的だ。また、淡いブルーとピンクの色彩に、裸婦独特の柔らかさを感じる。菊川有臣さんの作品は、若い女性の肌の質感や透明感がリアルに描かれ、こちらに何か語りかけてくるようなその女性の瞳に吸い込まれそう。作品に囲まれた店内は裸婦の柔らかく温かい雰囲気包まれ、つい長居したくなるようなくつろげる空間となっている。(M.I/M.N)



中根和宏 家具デザインと作品展

2011.8.23 ~ 2011.8.28 熊本県伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35 096-324-4930

南阿蘇にある椅子工房・之(ユキ)の中根和宏さんによる個展。箸置きからベッドまで日常的な家具が展示されており、全て中根さんの手作りである。無垢の木を素材としており、表面から金具が見えないように作られている。シンプルで美しく木材の温かみを感じられる作品である。中でも目を引かれたのが『小椅子 Yuki』である。三脚で背もたれは低く、他に展示されている椅子とは違い、デザインが独特である。この展示では実際に作品に触れたり、座り心地を確かめられる。また作品は販売されているので作家と話し合いながら、気に入ったものを購入できる。会場では見学者が手触りを確かめながら、鑑賞していた。木の素材が最大限に生かされた家具を間近に見ることの出来る展示である。(A.T/Y.E)



おくゆかし種のせかい展

2011.8.12～2011.8.28 島田美術館ギャラリー
熊本市島崎 4-5-28 096-352-4597

東海大学農学部教授長野克也さんと、島田美術館の島田有子さんによる「おくゆかし種のせかい」展が行われた。普段は気にもとめず、見落としてしまいがちな「タネ」だが、私たちの生活に深く関わり、なくてはならない存在である。私たちの体に比べると小さなものだが、その小さな「タネ」の中には、厳しい自然の中で生き抜いて生命をつないでいくための、シンプルで賢い知恵が詰まっている。ソリザヤの種は、まるで蝶々が乱舞している様に飛んでいく。また、主に東南アジアの珍しい「タネ」を見ることができ、生命の神秘について考えさせられる。「種をあなどるなかれ!!」(KS/TS)



いずみ南絵画クラブさくひん展

2011.8.22～2011.8.31 画廊喫茶ジェイ
熊本市大江本町 6-9 096-372-8732

出水南中学校のPTAのクラブとして発足したいずみ南絵画クラブは、当時の美術の先生であった田代見三氏を講師に、スケッチ大会や旅行、月に一度の作品講評を通じて活動されている。制作を通じ美術を愛する人が集まり、意見を交わす交流の場として親しまれている。今回紹介する展覧会は、このいずみ南絵画クラブの会員10名による合同展である。中には会員のお孫さんの作品も展示され、絵画クラブの活動の長さを思わせる。作品は油彩・パステル・水彩など多岐にわたる。今回で26回を迎える本展は会員それぞれの視点から、日々の生活のなかで美しいと感じたものを主題に描かれた作品で構成されている。どの作品もモチーフのもつみずみずしい生命力・暖かみを感じさせる作品であり、美しいものは私たちの身近に存在するのだということを見せてくれる。(KM/M.O)



第四回 白州会展

2011.8.23～2011.8.29 県民百貨店 6F 美術画廊
熊本市桜町 3-22 096-322-1111

今回で第四回目となる白州会展では九州在住の白日会所属の作家21名の作品が展示してある。デパートという事もあり、来場者層も幅広く家族で楽しんでいる人や旅行帰りに立ち寄り人も見受けられた。年齢も作風も個性が光る作家達の作品が凝縮された展覧会となっている。古典的な油絵をはじめ板や段ボールを使ったものもあり、見応えがあった。今後も進化してであろう白州展に注目していきたい。(H.A/T.H)



GIMNY exhibition vol.5

2011.8.23～2011.8.28 ギャラリーカフェ アーク
熊本市上通町 5-46 イーストンビル 3F 096-352-3308

熊本県内で活動している日洋会のメンバーから9名が集まり、開いているグループ展。会場には油絵の作品が24点並んだ。「GIMNY」とは結成当初のメンバーの頭文字を取ってつけたものだそう。9名それぞれが自分のモチーフを選び、自由な発想で追求している「個性」に注目してほしい。作品の中では、井芹赫子さんの「背中を向けた女」が目をつけた。真っ赤に塗られたキャンバスにたたずむ裸の女性。その艶めかしい女性の曲線美を見事に描き出している。しかし、その立ち姿はどこか不思議である…と思ったら、実は元々背中を向けて横たわる女性の作品だったのを、あえて縦に展示したのだそう！固執しない自由な表現が素晴らしい。ギャラリーでは実際に作品の作者の方が迎えてくれ、直に作品のコンセプトなどを聞きながら鑑賞することができ、気楽に楽しめるアットホームな雰囲気での展覧会であった。(Yu.H/Y.T)



それぞれの四季 写真展

2011.8.19～2011.8.31 画廊喫茶三点鐘
手取本町 3-8 有明ビル 3F 096-326-3040

四季をテーマにした写真展である。出展者はオーナーの小山淡花子さんの呼びかけによって集った熊本出身の写真家たちだ。一人あたり2、3点ずつ出展されている。作品は、桜・鯉のぼり・紅葉・雪景色といった、懐かしさを覚える自然の風景が20点展示されている。特にほとんどの方が出展されている夕陽をテーマとした写真は見ごたえがあった。画廊であると同時に喫茶店でもあるため、ゆったりとコーヒーを飲みながら作品を楽しめた。「人は皆自然の中で生きており、自然に恩返しをするべきであって、その畏敬の念は芸術にも通じる」と小山さんは語る。展示会から話はそれるが、小山さん自身、熊本の伝統食料である水前寺のりの復興活動に力をいれている。そのような情熱が、今回の自然をテーマにした写真展にも反映されていたのではないかと感じた。(H.Y/R.M)



舘秀雄 近作展 ～大自然の感動を描く～

2011.8.23～2011.8.28 崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町 10-25 096-323-1158

広々とした空間に、濃密な油彩で描かれた風景画23点が悠然と立ち並ぶ。茨城県出身の油彩画家、舘秀雄さんは、今回熊本では4度目の個展になる。季節感のある鮮やかな色彩の作品群は、作者が実際に訪れた地で現地の空気を感じながら制作したものである。丁寧に細かく描写されているフラットな部分と、筆のタッチを残し、絵具の厚さを感じる部分が、一つの画面上でバランス良く混在し、独特の空気感を感じさせる。風景画ではあるが、そのままある姿を切り取ったものではなく、そこに存在しなかった人物など、作者のその場所での出会いや経験が新たに作品に構成され、成立している。様々な場所で描かれた風景画が並ぶ館内を歩くのは、まるで旅をしているかのような心地であった。(Y.M/S.F)



—第40回伝統工芸—「日本金工展 in 熊本」展

2011.8.2～2011.9.4 熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町 3-35 096-324-4930

全国より公募された作品の中から選出された入選品、113点の金工作品を展示。会場には作家たちの技巧と意匠が凝らされた作品群が麗々と並び、その完成度の高さを物語っている。めがねの形を組み合わせで作られたネックレスの作品、「メガネックレス」(新人賞受賞作品 伊藤恵美子さん)や、金工作品にして色彩の豊かさを感じさせる「鯉干物金具」(日本工芸会賞 竹之内恵美子さん)など、伝統的な手法で作られたユニークな作品もあり、来場者の目を楽しませてくれる。また本展覧会では、購入可能な作品が並んでいることも魅力のひとつである。(M.K/E.Y)



林浩－陶芸家とのコラボレーション－「額縁」を替えてみる vol.2

2011.7.5～7.11 県民百貨店 6階美術画廊
熊本市桜町 3-22 096-322-1111

林浩さんは2年前に陶芸家の福島万希子さんの展覧会で、陶の額縁を見たことが、今回の陶芸家たちとのコラボレーションのきっかけになり、知人である福島さん、山本幸一さん、ローゼン三早枝さん、許斐良助さんに、石膏を使った作品のイメージを渡し、陶の額縁制作を依頼したという。額縁完成後、作品を額縁に合わせて制作されたそうであるが、額縁の形状がアーティストに自由な解釈を与えたり、制約をもたらしたことがうかがえる多様な関係性が感じられた。「額縁」を替えてみるという前回の試みでは、作品と額縁が一体化し、枠をこえて作品が拡大するかのような様相を見せたのに対し、今回は存在感のある額縁によって、時が閉じ込められたかのように求心性が高まっていたといえよう。(Y.u.H)



第39回 硯心展

2011.8.17～8.22 アートスペース大宝堂
熊本県熊本市上通町 5-6 096-354-2155

熊本大学卒業生を中心に結成したグループの書作展で53人が各一点ずつ出品していた。漢字、かな、近代詩文と各自が今の想いを自分なりの表現で書かれており見ごたえのある会場になっていた。恩師の斎藤鶴跡教授の作品も展示されていた。米村聴雨さんの「一隅を照らす」は最高齢にふさわしく自然体で、りきみのない作品である。柏原御雲さんは細いすどい線質で書いていた。森山淡草さんは篆書で「絆」を、潤滑をきかせ、達筆さを感じさせている。三嶋天鴻さんは、手島右卿さんの「崩壊」を想い、東日本の震災を考えて、震えた横波の墨線で絵画的に表現していた。岩本竹田さんの「発心」は2字の構成がうまく力強かった。中島豊泉さんは「雨二モマケズ」を宮澤賢治の手帳から自分流にうまく臨書していた。(S.K)



第31回 兼城昌山とそのグループ展〈書〉

2011.8.9～8.14 熊本県立美術館・分館 第一室
熊本市二の丸2番 096-352-2111

熊本県書道連盟常任顧問の兼城昌山氏が、NHKや熊日や公民館で指導する書道教室やサークルの受講者をまとめた書道展である。出品者47名が各1点と、指導者の兼城氏が4点を陳列していた。師匠はいつものとおり「大字一字書」の、流石に安定した力作を見せてくれた。他に毎日展出品の常連と思われる「大字一字書」の中に見応えのある秀作が眼についた。特に、笹久美さんの淡墨による「縁」の滲みの美しさと、本田美代子さんの濃墨による「震」は、練度の高い線の魅力が眼を惹いた。結構ご高齢の方も参加しておられたようで、レベルを保つのは指導者も受講者も大変であるが、続けて学習される意欲に敬意を表したいと思った。(T.M)



ホームギャラリーからのお便り vol.7 LETTER FROM HOME GALLERY

ホームギャラリーからおすすめの1冊をご紹介します。

「松島図屏風：座敷からつづく海」（絵は語る9） 太田昌子著 平凡社 1995年

1点の絵を徹底的に読み解く「絵は語る」シリーズ。どの巻も出色の出来ですが、ここでは俵屋宗達筆《松島図屏風》について書かれた第9巻を取り上げます。

《松島図屏風》はフリーヤ美術館所蔵の六曲一双屏風、つまり二つで一組の屏風で、右隻に「荒磯」、左隻に「州浜」が描かれています。荒々しく猛々しい海の表現としてしばしば用いられる「荒磯」と、晴朗な海浜の情景を彷彿させる「州浜」という対極的な海のイメージを何故組み合わせたのか。筆者は、時に銅鏡に表される蓬莱の表現に、時に「大海の嶺」と呼ばれる庭園の形式に、時に仏画に表される荒波の向こうの州浜の浄土にと、「荒磯」と「州浜」を対する日本文化の海への眼差しを探ります。

たった一つの絵の中に、とある時代、とある文化圏の記憶が豊かに詰まっている。その事実を教えてくださいるのが「絵は語る」シリーズです。同趣旨のもので西洋美術に関しては「作品とコンテキスト」シリーズがあります。こちらもおすすめです。(M.F)



編集後記

先日、当館収蔵映像資料の映画「アンナ・マグダレーナ・バッハの年代記」を見ました。グスタフ・レオンハルトが圧倒的な技術と迫力でもって弾くバッハの楽曲の数々が、わずかな生活のシーンとナレーションをはさみながら、かなりの長さの演奏風景として映し出されていくだけのシンプルで厳格な名作なのですが、何かを想わせるな、と思ったら現在展示中の小谷元彦さんの作品のうち《Inferno》と《Terminal Documents》でした。このふたつの作品の圧倒的な音楽的效果にもぜひ注目（傾聴）してみてくださいね！

編集長 富澤治子

私にとっての秋。それはやっぱり芸術の秋です。この過ごしやすい時期に美術鑑賞や音楽や舞台など色々な場所に出かけて多くを吸収したいと思っています。しかしホームギャラリーにゆっくりと腰をかけて読書したり、夜はピアノの音色に酔いしれ、ベンチに寝ころんでタレルの光を楽しむ、という過ごし方も、いつもカウンターに座る側としては、実は密かな夢だったりします。みなさんにとって今年はどうな秋にしたいですか。

担当 大岩みゆき

●発行元／ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.54 2011年11月発行(秋号) ◎無料◎

●発行人／桜井 武 編集／富澤治子、大岩みゆき

●デザイン／(有)松永 壮デザイン事務所 ●印刷／シモダ印刷

●発行／熊本県立美術館 〒860-0845 熊本市上通町 2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧

*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田美代子
Yoshiko Honda (熊本県立美術館主任学芸員)
藏座江美
Emi Zoza (熊本県立美術館主任学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本県立美術館主任学芸員)
坂本顕子
Akiko Sakamoto (熊本県立美術館主任学芸員)
芦田彩美
Aki Ashida (熊本県立美術館学芸員)
大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本県立美術館学芸アシスタント)
藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本県立美術館学芸アシスタント)
高橋知江
Chie Takahashi (熊本県立美術館学芸アシスタント)
濱川倫子
Noriko Hamakawa (熊本県立美術館学芸アシスタント)

SUITTO KUMAMOTO

CAMKフレンドインタビュー ※今年度は脚本の次世代文化を変える人々をご紹介します。【スイット・クマモト】

プールスコート通りの路地裏にあるカフェ & 雑貨「orange」。作品展示やイベントも行い、近年カフェの隣に橙書店もオープン。まちなかのオアシス的存在である orange の店主、田尻久子さんにお話を伺いました。

橙書店に並ぶ本は、田尻さんのこだわりが感じられますが、どのように選書されるのですか。

普通の書店のやり方とは違って、出版社ごとに本を選び直接やりとりをしています。新刊もチェックしますが、例えば1年前に心にひっかからなかった本も、毎日いろんな人に会ったり、絵や写真を見たりしているうちにいつのまにか気になって、1年前はなかった本が今日は店に並んでいる、ということもあります(笑)。また、例えばですが、ある作家のエッセイを読んでいたら、その中でできた別の作家に興味が向かうこともあります。そうして次から次へと繋がっていく。橙書店の書棚を、植物が自生して広がっていくようにしたいと、常々思っています。

前にお薦めした本を、「まさに今、読みたい本でした」とか「自分で選んだら、まず選ばないのにすごく面白かった」と言われることが嬉しいことのひとつです。

毎回、ささやかでありながら存在感のあるイベントや展示をされていますね。

ギャラリーは、最初からやるつもりで始めたのではなかったのですが、知り合いの作家さんに展示を頼まれてやり始めたのがきっかけです。一度展示をすると、いろんな方からお声掛けいただくようになりました。本

を扱っていますので、絵本の原画展や、写真展も行います。川内倫子さんのトークショーや、伊藤比呂美さんの朗読会など、ゲストを迎えてイベントをすることもありますが、これをやりたいというよりは、回りの人からお声掛けいただいてやっています。まさに「巻き込まれ系」とでも言うのでしょうか(笑)。運営にあたっては、人とつながりに尽きるといえるか、なにより大切にしているものが今日まで繋がっているというかんじですね。

田尻さんはどんなアートが好きですか。

さりげないのに存在感があるもの。写真とか、抽象画とか、ジャンル分けはしません。よくどんな本が好きですかと聞かれるのですが、とくに「運命の1冊」みたいなものはその日の気分で変わりますので答えるのが難しいです。数多くの様々な本やアートに触れていくと、どんな分野のものであっても心惹かれるところがあって、そこが自分にとって大切なことだと思っています。

美術館にメッセージをお願いします。

現代美術館さんはとてもありがたい場所だと思っています。世の中王道なものとか分かりやすいものしかなくなってしまったらすごくつまらないと思うのです。こ

れからも現代美術館ならではの展示を期待します。

今後のイベントを教えてください。

10/21~30は、福岡のファッションブランド「GROU」のカラーオーダー会です。硫化染め、草木染めなど風合いにこだわったアイテムも並びます。11月は、「ku-fu-rin」というアンティークショップの企画で、3店舗のお店の文房具を集めて展示販売する予定です。



カフェ & 雑貨orangeと橙書店店主の田尻久子さん

WORLD NEWS

第54回ベネチアビエンナーレ
2011.6.4~11.27 ベネチア

今回のアーティストック・ディレクターはチューリッヒ市立美術館ディレクターで、雑誌「マルケット」編集長のピーチェ・クリガーであった。「ILLUMInations」と名付けられた総合テーマは、光、ランポの詩、ベンヤミンの著作、国ごとのパヴィリオン形式での展示というビエンナーレの特徴を示している。(写真1)

今年のパヴィリオン賞は、2010年夏に亡くなったクリストフ・シュリンゲンシーフの展示したドイツ館。祭壇を中心とした荘厳な空間に、アーティストの人生とその映像作品が交錯しながら蘇ってくるかのようで、病や葛藤など、光と影が互いを支えてきた過程が見えてくる。このタイミングならではの強いメッセージ性をもったものであった。

イギリス館(写真2)のマイク・ネルソンは、路地の奥に



(写真1) ジャルディニー 入口



(写真2) イギリス館
マイク・ネルソン



(写真3) セルビア館 ラーシャ・トドシェヴィッチ

ある廃墟のような空間を思わせるインスタレーションであった。生活がひっそりとまだ続いているのかのような生々しい痕跡に、好奇と冷淡な目をむける傍観者としての視線を意識させられた。またパヴィリオンの通常の展示空間を忘れさせるほど、場を容容させていることが驚きであった。

台湾はサウンドをテーマに掲げ、ワン・ホンカイ、スー・ユージェンの二名の作家を紹介した。ワンの《Music While We Work》では、故郷の町の砂糖工場で退職者を集め、その100年の歴史を有するかつての職場で音を集めたものである。その映像が会場の石壁に投影され、台湾社会においていまや周縁的な存在になっている砂糖工場の変遷をみてとることができるが、同時に労働者の息遣い、日々の営みの逞しさを強く印象づけるものであった。

また、ビエンナーレの各所で、これまで当館での展覧会に出品していただいたことのあるラーシャ・トドシェヴィッチ(セルビア 写真3)、マルクス・シンヴァルト(オーストリア 写真4)、マリナー・アブラモヴィッチ(モンテネグロ)らがパヴィリオンで紹介されており、その活躍を目にすることができ、嬉しく思った。

毎回、参加国が増え、多くのアーティストの作品が紹介され、今という時代のとらえ方、社会とのかかわりの多様性を実感する機会となっている。当館が開館して来年で10年となり、この間のアートや社会の在り方を、このベネチア・ヴィエンナーレの動向をふまえて考えていきたいと思う。(Y.H)



(写真4) オーストリア館 マルクス・シンヴァルト



(写真5) アメリカ館



(写真6) オレンジ館



(写真7) ルクセンブルク館



(写真8) フランス館



(写真9) 南アフリカ館



(写真10) ウルリス・フィッシャーによる蠅の彫刻。



(写真11) カテリーナ・フィリッチェ